

交換留学報告書

国際学部地域文化学科ヨーロッパ・アフリカコース

3 回生 前田涼汰

私は 2025 年 3 月から 8 月までの約 6 か月間、ドイツのケルンに留学しました。留学の目的は、ドイツ語の習得を通じて異文化を理解すること、そして自分の将来の方向性を考えるきっかけを得ることでした。もともとヨーロッパの文化や言語に関心があり、大学で学んできた知識を実際の生活の中で体験したいという思いから、この留学を決意しました。

到着当初は、すべてが新鮮であると同時に、言葉も環境も異なる中での生活に大きな不安を感じていました。特にドイツ語は授業で学んだ知識だけでは十分に対応できず、買い物や手続きなど日常生活の中で何度も戸惑いました。しかし、現地の人々はとても親切で、私の下手くそなドイツ語にも耳を傾けてくれました。そのおかげで、少しずつ自信を持って話せるようになり、間違いを恐れず挑戦する姿勢が身につきました。

語学面では、ケルン大学のドイツ語コースのオンラインを受講しました。週 5 日、文法・会話・リスニング・発音などを中心に学びました。授業は英語とドイツ語で行われ、最初の頃は先生の言っていることを理解するのに精一杯でした。しかし、学ぼうちに、徐々に耳が慣れ、相手の言葉を「意味で」理解できるようになっていきました。自分の考えをドイツ語でまとめて伝えるのは難しかったですが、何度も挑戦するうちに、表現力や語彙が確実に増えました。友達からドイツ語わかるようになってきたねっと言われたときは、努力が報われたようでとても嬉しかったです。

また、留学中は学業だけでなく、課外活動にも積極的に取り組みました。私は野球が好きで、日本でも長くプレーしてきたため、ケルンにある「Cologne Cardinals」というチームに参加しました。ドイツでは野球はマイナーなスポーツですが、チームのメンバーはとても情熱的で、国籍や年齢を超えて一緒に野球を楽しむことができました。最初は言葉の壁があり、指示や会話を理解するのに苦労しましたが、ジェスチャーや簡単な英語、ドイツ語を使いながら少しずつ馴染んでいきました。練習の後にチームメイトと食事に行くこともあり、スポーツを通じて生まれる絆の強さを実感しました。野球を通して学んだ「コミュニケーションの本質」は、これからの人生においても大切な財産になると思います。

生活面では、ケルン近郊の学生寮に住みました。日本とは違い、部屋やキッチン、バスルームを他の

学生と共有する生活だったため、最初は不便に感じることもありました。しかし、共同生活を通して他国の学生と交流できたことはとても貴重な経験でした。掃除のルールや洗濯の順番など、文化や価値観の違いから意見が食い違うこともありました。話し合いながら解決する中で、他者を尊重しながら生活する力が養われました。自炊や洗濯などもすべて自分で行う必要があります、改めて家族のありがたさを感じると同時に、自立心が大きく成長したと感じています。

また、留学中は勉強や部活だけでなく、ヨーロッパ各地を一人で旅行する機会も得ました。8 月にはチェコのプラハ、イタリアのローマ・フィレンツェ・ヴェネツィア、そしてスペインのマドリードやバルセロナを訪れました。それぞれの都市には独自の歴史や文化があり、街並みや人々の雰囲気もまったく異なります。特に印象に残っているのは、マドリードで観戦したレアル・マドリードのサッカーの試合です。スタジアムの熱気と観客の一体感に圧倒され、スポーツが人々をつなぐ力を改めて感じました。こうした一人旅を通して、自分で計画を立て、トラブルが起きても冷静に対処する力が身につきました。

振り返ると、留学前は「言葉が通じなかったらどうしよう」「友達ができなかったらどうしよう」と不安ばかりでしたが、実際に生活してみると、困難を乗り越えるたびに自信がついていくのを感じました。ドイツでは失敗を恐れずに挑戦することが評価される文化があり、その考え方に触れたことで、私自身も物事に前向きに取り組めるようになりました。

この 6 か月間の経験を通して得たものは、語学力や知識だけではなく、自分の考えを相手に伝える力、異なる価値観を受け入れる姿勢、そして困難に直面したときに自ら行動する勇気を身につけることができました。留学は決して楽しいことばかりではありませんが、挑戦することで見えてくる新しい世界がありました。

今後は、この留学で得た経験を活かし、国際的な環境の中で自分の力を発揮できるよう努力していきたいです。言葉や文化の壁を越えて、人と人をつなげる存在になることが、私の新たな目標です。

今後留学へ行く人へのアドバイスで、留学では「完璧」を目指さず、間違いを恐れずに挑戦することが大切です。失敗も貴重な経験になります。積極的に人と関わり、異文化の中で自分を成長させてください。